



熱風ど

かど

か

回

椎名誠

小生
おろって
かえりや
ない
のか



赤松工業学院図書館
朝日新聞社
蔵書印

新宿熱風どかどか団

一九九八年十月一日 第一刷発行

著 者 椎 名 誠

発行者 岡本 行正

発行所 朝日新聞社

〒一〇四―八〇―一 東京都中央区築地五―三―二

電話〇三―三五四五―〇一三一（代表）

編集・書籍編集部 ◆販売・出版販売部

振替〇〇―〇〇―七―七三〇

印刷所 凸版印刷

©Shina Makoto 1998 ISBN4-02-257288-4

Printed in Japan

◆定価はカバーに表示してあります。

新宿熱風とかとか団◎目次

大盛り五目チャーシューワンタンメン……………	7
雑誌黄金時代……………	18
串本グランドホテルで苦悩する……………	28
魚になったり馬になったり……………	39
愛と決断の人生ラーメン……………	50
日立RAP―一六一型の秘密……………	61
南島逆上ハリホラ隊……………	72
肉まんとカツオブシ……………	83
ガニマタキックガード下の炸裂……………	94
ゾロ目がおれを呼んでいる……………	105
哀愁の戦腹中派……………	117
三つの袋がどうしたこうした……………	128
泥沼を夜かけわたる……………	139
ラーメン西遊記……………	150
カタカナ族がやってきた……………	161

山手線三分間劇場	171
哀愁とコーフンの中央線	182
フランス料理にくさやの前菜	193
居酒屋怪々疑惑論	204
突然風雪ながれ旅	214
閑話休題、呆然と騒然、ビールとあんま	225
ばかうまビールとうどんの探究視察団	235
人生いたるところに悩みあり	246
新宿ひるどき突然のラブストーリー	256
人間いたるところに逆上あり	266
土星と百万円	277
どーだどーだの一億円	288
あとがき	299

装幀／平野 甲賀
装画・本文挿画／沢野ひとし

新宿熱風とかどうか団

大盛り五目チャーシューワンタンメン

またまたこういうところに出てきて、おかしいタイトルのもとに、世間の人にはどうでもいいような連続的右往左往話を書くことになってしまった。

一応、話の展開としては『本の雑誌血風録』のつづきになるのだが、その本を読んだ人はすぐにわかるように、読んでも別に新しい知識が増える訳でもないし、人生の明日にむかって力強く生きていく手がかり足がかりを得られる訳でもなく「ふーん」もしくは「それでエ？」といったような反応があるかないか、という程度の話の世界なので「ふーん」もしくは「それでエ？」関係の方はどうかこのへんですばやく頁をとじて別の方向へすすんでいていただきたい。

でもって話は唐突にはじまるが、一九八〇年なのである！ 思えば今から（この本の執筆時は一九九七年）ナント十七年前ではないか。あたり前だが、しかし考えてみたら十七年前というの

は随分むかしのことだ。

この年何があったかという、たとえばテレビではフジカラーが、

「美しい人はより美しく、そうでない方は」

「そうでない方は？」

「それなりに写ります」

というCMをやっていた。それをぼんやり見ていた記憶がある。

一九八〇年なのである！

などと力を込めて！マークつきで申しあげながら、この程度のぼんやり記憶しかないというの
もなさけない話だが、しかしこの年、世の中も自分のまわりも目まぐるしくいろんなことが続け
ざまにおきていたのだが、騒々しい割にはよく自身なんだかとかくやっぱり呆然としていた。
ぼうつとしてあまり元気がなかった。

三十五歳であった。

世間的にいうと三十五歳などという男の働きざかりであり、体力的にもまだそこそこ若く、
しかし一応三十代のまん中だから二十代のガキじゃないんだかな、という“大人”の自負とい
うものがそろそろある。

そういうバランスのいい年齢である筈だったのだが、実際はどうもそうではなくて、いま思え
ば人生の中で一番の迷い道にはまっていて、なんだか体力も精神力も自信がなくなり、少々途方
に暮れていた。

銀座八丁目にある勤め先に通っていたが、その会社でどんどん突っ走って創刊した雑誌「ストアーズレポート」の編集長も足掛け五年目になり、少々飽きがきていた。

友人の目黒考二と創刊した書評雑誌「本の雑誌」は三年目に入り、これも創刊当初の頃の「なんでもあり」で、しかも「なにがおきるかわからない」状態からはだいぶ落ち着いてきて、隔月刊のサイクルはまだ守れず隔月刊といいつつ年五回だったりしていたが、発刊部数は二万部近くになっていた。

事務所兼編集室は新宿区信濃町のけっこう古くて大きなマンションの一室にあつて、引越しする前の四谷三丁目のトコロテン部屋（定員四〜五名。誰か人がくるとその人数の分だけ外に出なければならぬ）からくらべたら六倍強にスペースがひろがっていた。畳敷きの二間、台所やベランダまであつたから、トコロテン部屋から幕の内弁当部屋ぐらいの立派なものに昇格していた。

本の雑誌社たった一人社員の群ようこも南側に大きくひらいた窓にむかって机を置き、トコロテン部屋の四方の壁からの圧迫感もなくなり、漸く本来の明るく楽しい本好きのおネーさんに戻ったようであつた。

ただ問題は古いマンションなので、部屋備えつけのエアコンの具合がよくない。冬は暖まらず夏は涼しくならないのである。

そこで目黒考二が前に勤めていた会社で不要になった室内型エアコンを一台貰ってきた。日立RAP-161型という機種で冷蔵庫ぐらいの大きさであつたが、とにかくこれも相当に古い。

電気のスイッチを入れるととりあえず作動するが、全身をふるわせて動くのである。常に部屋の端でガタガタブルブルと全身を動かしているエアコンというのも相当に強引な存在感がある。ガタガタブルブルしつつそれでも時おりため息のような暖気が出てくるのでコンクリート冷える。こういう部屋ではその働きぶりがけなげで愛らしかった。

ぼくは銀座の会社とこの信濃町の新オフィスの両方に顔を出すのだが、いかに本の雑誌社から一円の金も貰っていないとはいえ、サラリーマンとしては本業をさぼってこういうところを日常的にもうひとつの根城にしている訳だからどうにもオコナイが悪かった。

けれどぼくはもう気持ちのまん中のへんでは銀座の会社をやめたくてもうがなかったのである。いま思うにおそらくその理由やきっかけをじわじわ搜しているようなところがあつたのだらう。ニンゲンというのはすこし時間がたたないとなかなか自分の本当の気持ちなどというのは客観的に見るができないものだ。

スペースが広くなったので、事務所には群ようこの他に常に誰か学生の助っ人（手伝い）が常駐していた。

「本の雑誌」はまだ東販、日販等の書籍の取次を通しておらず、相変わらず書店との「直取引」であつたから、書店に納めた部数が減ってきて追加の注文が入るとそば屋の出前のように「アイヨッ！」といってすぐに注文部数を持って助っ人の学生たちがその書店に届けるのだ。

この助っ人メンバーを「配本部隊」と呼んでいた。

通常「本の雑誌」クラスの小さな出版社（まだ会社にもなっていない）に追加納品本の注文があっても、取次経由でいくとそのフクザツな流通ルートが関係してきて、一週間ぐらい時間がかかってしまうことがザラにあるという。

しかし我々のその出前式アイヨタダイヤモンドシステムは話が早かった。

「十五部追加！」

「アイヨ！ 今でるところです」

なのである。

四谷三丁目から信濃町に移ってよかったことのもうひとつは、近くに「珍満」というまことに味とかんじのいい中華料理店があって、ここは中年夫婦とその娘さんでやっている。出前を注文するとそっちの方はもっと本格的に、

「アイヨ！」

と気持ちよく電話で応え、やがてすこし坂になった道をオカモチを提げてその娘さんがやってくる。

ここで一番うまくてすごいのが大盛り五目チャーシューワンタンメンで、これがやってくると心も体もコーフンした。しかし今思うと三十五歳にもなってよくあんなすごいのを食っていたものだ、と思う。

朝十時に銀座の会社に行つて、もうその頃実質的な「ストアーズレポート」の編集長をやつていた菊池仁に「じゃちょっと行つてくっかん」と一応小さな声でこわつて信濃町の本の雑誌

社に行き、いろんな原稿を（もちろん本業の会社のものも含めて）書き、昼にこの「大盛り五目——」を注文し、様子を見てまた銀座に戻ったり戻らなかったりという日々をおくっていた。

時おり目黒や沢野ひとしがやってくる。木村晋介もんでもない時間に顔を出した。

配本部隊は初期の頃の主力の米藤俊明や千協隆夫らが就職して一般社会の荒野に散り、代が替わっていた。

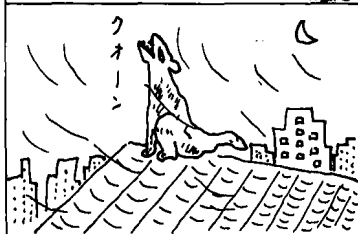
新たなメンバーはなんとなく全体に軽いかんじの荻部庸二郎、全体に重いかんじの山川哲也、若髭（若いくせに髭を生やしている）の中野英明、ヒョウな沢田康彦らの男子学生に、迫村若恵、小沢由紀、大西郁子、村松功江、大田朋子といった元気な女子大生が加わってモーレッツに賑やかになっていた。

群ようこはこれら学生たちをまとめるやたらに話の面白いおネーさんという役割で、まあしかしそれでも全体に「なにがなんだかわかんないところ」という編集室としての基本状況は四谷三丁目の頃とあまり変わらなかった。

したがっていつも大変うるさいところになっていたけれど、毎日杲然としてしまっているばかりにはこの騒然さがかえってよかった。

男子学生や女子学生がわあわあやっているところへ沢野が入ってくると、彼はたちまち「うるさいお前ら！」と大きい声で怒った。本当はそういうことはぼくや目黒の役目だったが、目黒は相変わらず夜ずっとおきていて昼寝しているのであまりやってこないし、ぼくはとにかく杲然としているのでそうやって怒る元氣もない。

新宿 ドカドカ物語 連載①



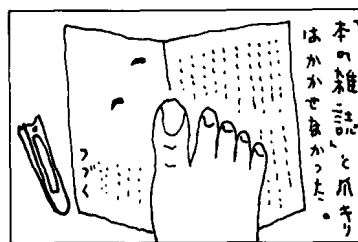
シヤリアーは帰る。

目黒、来にもネクタイを
した。



あの
沢野のしも
なぜか
いた。

どうもマコトです



そちさん
木村亜介
もいた。



今夜は
池袋屋があった。

その頃流行^{はや}っていた「恋人よ」の五輪真弓をゴリンマユミと呼んで女子学生にモロにバカにされたりしていた。

その年最初に出た「本の雑誌」第十六号には「瞑想乱舞の初春号」というサブタイトルをつけた。「本の雑誌」のサブタイトルはいつもぼくがつけていたが、どうも我ながらいまひとつこの号は意味意図不明正体不明で、字面のどこかに気取りがある。もっと正直に「おかわり大盛り五目チャーシューワンタンメン号」としたほうがよかったのだなあ、と思う。

第十七号「なんだ文句あつか陽春号」は三月に出た。

信濃町のそのマンションに落ちつくまであちこちで事務所に使える安くて広いマンションはないかと捜していたのだが、手付金を打つてはその後発覚した問題で話がこわれてしまうことが二度続き、とにかく手付金の損ばかりしていた。

だから本当は「手付けは打ったぜ陽春号」というのにしなかったのだがそれじゃあ読者はなんのことだかわからない、と冷静な目黒が言うので「なんだ文句あつか——」に変えたのだが、これも今思えば「手付け——」のままにしておいたほうがよかったように思う。

第十八号は「立ち読みすんなよ特大号」というサブタイトルでいった。十六頁増の特大号なのでどうも全体にエバっている。通常号は三百円なので特大号はどおんと三百五十円だった。

時代はまだつましかった。

銀座三丁目の昭和通りの歩道のガードレールの支柱にふろしき包みがあるのを、トラックで通